議 事 概 要

1 会議の名称

第3次長久手市子ども読書活動推進計画第2回策定委員会

2 開催の日時

令和4年8月3日（水）午前10時から正午まで

3 開催場所

中央図書館 2階 AV ルーム

4 出席者

委員長	青木文美
副委員長	中西由香里
委員	竹内双葉
委員	高橋浩子
委員	鈴木節子
委員	鈴木直美
委員	山田真理子

（事務局）

教育部次長	川本保則
中央図書館長	二之部香奈子
図書係長	水野香織
同係主事	田中絵里子

5 欠席者

無し

6 会議の公開・非公開

公開

傍聴 1人

7　議題

⑴　ワークショップについて

⑵　アンケート結果について

8　問合先

長久手市教育委員会　中央図書館

TEL　0561-63-8006

議事録

開会　　　　委員長あいさつ

<議題（1）>　事務局　資料説明（資料1－1、1－2、1－3）

委員長　　今回のワークショップではファシリテーターを務めました。大変活発なワークショップが開催され、様々な意見を伺うことができました。司会をしていた立場から報告させていただくと、1回目の中では、子どもの周辺に読書のできる環境作りをすることが非常に重要であること、2回目はどのグループも環境と人作りが非常に重要であるという意見が出ました。中央図書館に限らず、保育園や児童館、学校などの施設で、子どもに読書が面白いと思う場を提供するだけでなく、保護者や地域の人など、子どもに関わる多くの大人たちが子どもの読書環境をいかに守るのか考える必要があります。インターネットの普及で、オンライン授業が活発に行われている現状があります。適切な情報を自ら選択することや、社会人として必要な読書の能力など、将来のことを見据えながら読書活動を考える必要があると考えました。事務局からの説明や資料内容について質問ご意見はありますか。

委員　　１回目、2回目の両方参加させていただきました。1回目はグループテーマについて真剣に考え、意見を出しましたが、2回目のテーマは、タブレットによる調べ学習ということで、現在の子どもの状況が分からず、他の方の意見を聞きながら考えました。本を読むことの楽しさをどうやって伝えるかの難しさを感じました。どうしたら子どもたちがもっと本とふれあい、本が楽しいものだと思ってもらえるのか真剣に考えないと

いけない時期に来ていると感じました。

委員　　2回目のAグループに参加しました。初めてお会いした方とは思えないぐらい、コミュニケーションを取って話合いができ、2時間という時間もあっという間に感じました。活発な意見が出て、とても有意義な時間を過ごすことができました。

委員　　2回目のＢグループで参加しました。ワークショップに参加するのが初めてで、どういうものか分からず、１回目のニュースレターを見たり、参加した友人から様子を聞いたりしていました。参加された皆さんが子どもと読書について、たくさんの意見を出されていたので、たくさんの人が子どもの読書について真剣に考えていると感じました。そういう方達がまだまだいらっしゃることは素晴らしいことで嬉しく思いました。ワークショップで出た意見がこの第3次長久手市子ども読書活動推進計画に反映されればいいと感じました。

委員　　ワークショップのまとめを見て、皆さんが子どもたちのために考えてくださっていることが分かり、学校で児童と関わっている身として、とても嬉しく思いました。今回ワークショップに参加していないため、担任しているクラスの様子をお話します。この委員会に委員として参加してから児童の読書の様子をよく見るようになりました。授業で図書室に連れて行き、学校連携司書が楽しく本の読み聞かせをした後、図書室内の本を自由に読む時間を設けています。そうすると、たくさんの児童が図鑑などの絵や写真が多く載っている本を読んでいました。活字を読むことが苦手な児童はそれでも良いと思っています。それを受け止め、そこから発展して活字の本を読んでもらえるように、学校連携司書だけでなく、担任である自分も読み聞かせを行ったり、あえて絵を見せずに子どもの頭の中でたくさん想像できるように読み聞かせをしたりして、夏までにたくさんの本を読み聞かせました。担当しているクラスが1年生で、調べ学習はできないため、今はとにかく本と親しめるようにしました。そのような取組をしていたため、図書室が大好きな児童ばかりになり、学年の貸出冊数のランキングで上位になっていました。大人の働きかけがとても重要で、高学年よりも低学年からたくさん働きかけることが重要だと感じました。

委員　　1、2回目に参加しました。一保育士としての視点から意見を出しましたが、司書の

方や図書館ボランティアの方等、いろいろな年代の方が参加されて意見を交換したことから視野が広がり、本や読み聞かせの大切さを改めて感じました。現在、保育園では年長の園児を対象に本の貸出を再開しました。子どもたちがクラスの中にある本を、目をキラキラさせて手に取り、選んでいるのはとても良い時間だと思います。保育園の中でも朝の会やお昼ご飯の前など、1日の中で何回も読み聞かせをしており、中には遊びの時間でこの本を読んでと園児から言われ、読むこともあります。本と触れあう時間はたくさんあり、そういった時間を確保できている時期は大切なんだと感じました。

副委員長　ワークショップは欠席しましたが、私自身教育現場に長くいたことから考えたことをお話しします。子どもが主体となる読書環境はとても大切であり、読書は、物的環境であるもの（本）と子どもに本を手渡す人（人的環境）が重要だと考えています。特に、学校現場では、学校図書館の設置は義務となっていますが、幼児教育の現場では、努力義務であるため、絵本や紙芝居が置いてある園もあれば全く置かれていない園もあります。また、ブックスタートなど小さいときから本を繋いでいくことが大切だと考えています。今後、愛知県の中高一貫教育校では、探究学習を行っていくようです。本と出会えるようにフォローしていくことは、ワークショップの記録や愛知県の動きを見て大事だと感じました。

委員長　教育が大きく動き、人口が減っていく中で図書館が子ども読書をどう支えていくか。これから、第3次長久手市子ども読書活動推進計画策定として、何を基軸にしながら新たな計画を作り上げていくのかを考えていく必要があると考えています。まずは第3次長久手市子ども読書活動推進計画策定の前にどのような分析が出てきたのか、議題2のアンケート結果について事務局から説明をお願いします。

＜議題（2）＞　事務局 資料説明2

委員長　今の説明は事務局で集計した結果を分析した内容です。皆さんも資料をご覧になったと思います。課題点や取組の案などを出していただければと思います。いかに子どもが本と触れあう場を作るか、大きな課題だと感じたのは、資料2の28ページの

「あなたは1か月にどれくらい本を読みますか？」の質問の結果で、小学4年生から6年生に移行するところで、「ほとんど・まったく読まない」「1冊から2冊」という回答の割合が大きく増加しています。本を読む子と読まない子に明確に差が出ていることが分かります。子育てしている身としては、自分の子には賢くなってほしい、知識を身に付けてほしいという思いから悪意なく、「本を読んだら」、「本に書いてあるよ」という声かけを子にしてしまいます。幼稚園から小学校に上がるまで本を好きで読んでいたような子どもが本から離れていってしまうのは、そういった働きかけなどで本が教育と繋がっているように感じて避けてしまうのではないかと思いました。どういったことが必要なのか考えたところ、先ほど、委員からお話しがあった児童の様子で、あえて絵を見せないで読み聞かせるような、言葉を耳で聞いて想像することは、教科書を読んで理解することと、同じ本を読んでいても違うことだと思います。1つのキーポイントだと思いました。下地として、小さいときから本を意味もなく見たり戯れたりすることなど、本との出会いが保障されることは重要だと思いました。皆さんのご意見をお聞かせください。

委員　　私が一番感じたのは、読書手帳の使い方についてです。どのように使われているのか分からず、この集計を見ても子どもたちにあまり知られていないのがショックでした。私は1年間に読んだ本のタイトルや感想を自分の手帳に記録しています。後で振り返って見て、この本面白かったな、心に残っているなと思うことができるため、読んだ本を記録することを子どもたちにも薦めたいです。1年生の最初に読んだ2、3冊でいいから書いてみましょう、と先生から声かけをして皆で書いてみる等、習慣づけることが必要なのではないでしょうか。その記録をためることは競争ではなく、本の楽しさを知るためのものにしてほしいと思います。習慣付けをするためには小さいときが良いのではないかと感じました。

委員長　　私も読書手帳について気になりました。記録することの意義を考えると、学校だけでなく、絵本を借りに来たお父さん、お母さんに渡し、自分の子に何を読んであげたのか記録することは、のちのち、子どもがそれを見て「私にこれだけ本を読んでくれたんだ」ということが分かり、振り返ったときに励みになります。「ここからは自分で付け

てみよう」という意識に繋がるのではないかと思います。読書手帳として学校で渡すと、子どもの自己責任になってしまうため、例えば乳幼児の子どもが借りた本を保護者が記録して、親子での会話が生まれれば違う形で本との出会いが生まれると感じました。

委員　読書手帳について私も色々思ったことがありました。幼少期から読書記録をするのであれば、ブックスタートパックとして一緒に渡すのはいかがでしょうか。保護者が子どもに読んだ本を記録することはいいと思いました。自分の子どもが中学1年生の時に、授業の一環で自分が赤ちゃんだった頃の話を保護者に聞いてくるというものや、家庭科の授業で絵本について知るというものがあり、子どもから色々と聞かれ、小さいときのことを振り返りました。私が読み聞かせた中で子どもが気に入っていたものは記録に残っていました。中学生になった子どもにその記録を渡すことで、思い出すことや、考えてくれることがあると思います。読書手帳を子どもが生まれる前の段階から渡すことは良い方法だと思いました。しかし、中央図書館のどこに読書手帳が置いてあるのかが分かりません。自動貸出機の隣に置くとか利用カードの新規登録をされたときに渡すとか、その人がその後利用するかは別として、すぐに手に取れるところに置く必要があるのではないでしょうか。図書館のホームページでも読書の記録を残すことができるため、そういったものもPRするべきだと思います。

事務局　読書手帳の配布方法ですが、中央図書館で紙で作成しており、ホームページでもデータを掲載しています。子どもたちへは、市内小学3年生対象の図書館見学で配布しています。コロナ禍でも市内全小学校で図書館見学を実施できていますので、必ず読書手帳を1人1冊手渡しできるよう準備しています。図書館見学で、普段入れない地下やバックヤードにも入ってもらい、図書館はわくわくして楽しい場所なんだ、という気持ちを持っているときに読書手帳を渡しています。しかし、アンケートでは認知度が低いという結果となり、それほど児童の心に残っていないということは図書館の働きかけとしては弱かったと実感しています。また、保護者の方への働きかけは、なかなかできていないと反省しています。ホームページに掲載していますが、どれだけの保護者がホームページにある読書手帳の案内を見ているか、そこの認知度が

低いと反省しています。また、特に大人にお薦めしたいのが、読書手帳という名前ではありませんが、図書館のホームページの利用者のページで読書記録をすることです。読書手帳の様にシステムで残すことができます。大人への働きかけも含めてうまくPRしていきたいと考えます。

委員長　図書館見学時の小学校3年生への配布が正式なやり方とのことですが、ワークショップでも意見があったように、親も含めて子どもに読む場を提供し、育てていくことが大きな課題としてあると感じました。子どもとその親が親子になっていくことをブックスタートは支えていると思います。どれだけ我が子と向き合ったかの記録は、そのときでないと残せない記録だと思います。産科で、赤ちゃんの起床時間等生活を記録する冊子を渡していると思いますが、それと同じで、図書館が父母に向けて読書記録を取っていくことを支えていくと、本が好きな子が増えるのではないでしょうか。読書記録をつけることは、小学 3 年生ぐらいの年齢からでないと難しいと思いますが、その子の読書の記録は、ブックスタートのときからが良いと思います。例えば、保育園の連絡帳に、些細なことでも何があったかを書くことで保護者に伝わり、記録として残ります。親の記憶にも子どもの記憶にもなくなっていることが連絡帳に残っていることは、後で貴重なものとなります。既に読書手帳があるので、うまく活用するべきだと感じました。

委員　読書手帳自体全く知らなかったため、カウンターの職員に問い合わせて読書手帳をいただきました。実物を見てみると可愛くて、愛着があって、これを活用して子どもの成長の記録を残していくことができれば素晴らしいと感じました。最後まで書くと、たくさん読んだで賞としてシールを貼ってもらって、鉛筆をもらえるそうです。すごく嬉しいと思います。そこに、「長久手市中央図書館」と刻印されているとプレミアム感が出て良いと思います。鉛筆をもらった子の周りの友達も興味を持ってくれると思います。お金はかかってしまうと思いますが、読書手帳に「プレミアム鉛筆プレゼント」と書いてあったらみんな欲しくなると思います。資料2を見て一番感じました。

また、小中学校の入学式後のオリエンテーションで校内巡りをすると思います。学校図書館へも行くと思いますが、図書館への興味が無い子に興味を持ってもらうために

は、オリエンテーションだけでなく、入学式以降にも図書館へじっくり行く時間を設けることが大切だと思いました。中には図書館の場所さえ知らない子もいると思います。担任の先生から働きかけ、ここに図書館があるよ、いつでも来ていいよと声をかけ、本の借り方など使い方を説明すれば、より本に触れることができると思います。

副委員長　読書手帳についてですが、ブックスタートのときから記録を取っていくと良いと思います。私自身教育現場にいましたが、卒業式や保護者会で１人１人の読書記録を担任の先生から生徒へ手渡してあげることで、自己肯定感が高まると思いました。読んだ量が目に見えないと、読んでいないように思いますが、卒業式のときに図書館を保護者の待合の場にする際、読書記録を保護者に渡すと、我が子が学校の中でどのように読書活動していたのか様子が分かってきます。子どもの自己肯定感を高めるという意味においても、読書手帳は、義務教育にとどまらず高等学校まで活用してほしいと思います。

また、国語の授業で学校図書館を活用できると思います。小学１年生の5月頃に、単元の中に読書指導が組み込まれています。本と親しむことを低学年で行い、中学年では読み広げる、高学年では読み深める読書活動を行います。中学年では、国語の授業に国語辞典や百科事典の使い方も組み込まれています。中学校でも同様に学校図書館の内容はあります。私が教育現場にいたときは、学校図書館がよく利用されていました。読み物だけでなく、興味のある部活動の雑誌や音楽、学校にない本は、タブレットで検索方法や予約の仕方を教えて、公共図書館の出先機関である公民館に取りに行くように指示したこともありました。長久手市の場合は、先生方と学校連携司書との連携がとれているため、教科の時間にできることだと思います。

また、廊下にもブックトラックを置いてもいました。来られない時間もありましたが、先生に学校図書館に来てもらい、必ず大人がいるようにすると、中学生でも学校図書館に大勢の生徒が集まってきました。本を読むことはもちろん、タブレットの使い方もそこで覚えたり、友達が読んで面白かった本を薦め合ったりしていました。4年生から6年生で読書量が減っていることについては、読む本の厚さが薄い本から分厚い本へ移行する時期でもあります。そういう時期に、読書会を開くと、多角的な視点から様々な

意見を聞くことができて有効ではないでしょうか。

委員長　ブックトラックについては、資料2の69ページでブックトラックの購入についての話がありました。長久手市は小中学校の図書室は常に開いていますか。

事務局　開いていません。

委員長　巻末の資料だと、学級文庫を充実させるという話がありましたが、例えば学校の図書館を限定的に開けているのであれば、ブックトラックで学級文庫と違うタイプの本との出会いを作るために、教室へ出向くなどの取組が必要かもしれないと考えました。また、小学4年生から6年生の間の読むことについては、活字を読むことが多くなり、学校教育もガラッと変わっていくため、そこがターニングポイントになっていると思います。子ども同士で読み合うことも大事なことだと思いますが、そこへ踏み込めない子どももいると思います。読むことが苦しい、読めるがすぐに疲れてしまう子のための手立てとして、大人が読んでいる姿を見せていく機会があってもいいのではないでしょうか。黙読に入れない子がもう一度本と向き合うチャンスを作るために、大人が朗読をする機会があるといいと思います。一文字飛ばして読んでしまっても、大人もそうやって読んでいるということが分かるだけでも、読書が負担になる子や本と繋がれない子の負担を無くせるのではないでしょうか。大人が子どもへ本を読むように言うばかりではなく、大人が本を読んでいる様子を子どもに見せるということが大切だと感じました。

委員　私も、もっと自由に読み聞かせができるといいと思いました。どうしたらもっと簡単に大人が読み聞かせられるかと考えました。また、小学生、中学生へあなたの好きな本を教えてください、その本を読み聞かせしませんか、小さい子に読んであげませんかという声かけをしてはいかがでしょうか。この間のワークショップで、堅苦しくなく、ゲリラ的な読み聞かせがあってもいいという意見がありました。中央図書館1階にある《はなしのひろば》を提供して、大人だけではなく、小学生、中学生の子が友達と来たり1人で来たりして、また、読み手も大人だけではなく、小学生、中学生が好きな本を声に出して自由に読む機会があれば、より本と親しむことができるのではないでしょうか。

委員長　　　教育の現場で先生から「やれ」と言われたことをやろうと努力して、できなければ「どうしてできない」と言われるということは、確かにおかしなことだと思います。そういった場が教育の現場だとすれば、図書館はそういう子でも受け止め、誤読することも、全く違うことを考えることも許容される場であると思います。誤読ができる場として、大きい子が小さい子達へ自分の好きな本を読む場はめったにないと思います。学校では読んだ冊数や、あらすじを書いて感想を伝えることはありますが、本を読んで感動しても言葉にできなくて黙ってしまう子も一定数います。そういう子が学校の図書室や、図書の時間、図書館や他の施設で、ほかの子に向けて実際に読んで聞かせるというのがあると良いと思います。今はコロナ禍で、保育園は大変だと思いますが、卒園して2、3年経った子が園に行き、自分が本を読んでいる姿を周りの小さい子が見ている、というような本との出会いの場があってもいいのではないかと思いました。

副委員長　　子どもが子どもに読み聞かせることはとても大事なことだと思います。小学校１年生の子が年長の園児に読んであげることは、やる気になって練習もするため、良い取り組みだと思います。もう一つ忘れてはならないのは、特別支援を要する子ども達もいることです。タブレットの音声読み上げ機能を用いれば、外国籍の子どもたちに母語での読み聞かせができます。また、発達障害など特別な支援を必要とする子のためのデジタルコンテンツもたくさんあるため、有効な支援ができます。学校図書館は、成績には関与しない場です。そのため、学校図書館に学校司書がいれば登校できる子もいます。学校図書館の居場所としての機能を発揮することができ、１人１人が活躍できることは重要なことと思います。

委員長　　タブレットを使った学習がこれから進んでいくと思いますが、大人が有効に使う方法を見い出せず、子どもに後追いしている状況です。音声なら本に親しめる子はいます。読むということの技術ではなく、頭の中に勝手にものが浮かんでくる楽しさ、読む前は知らなかったことが分かることなど、知的な経験を積む場が図書館であるとすると、子どもにとって幸せだと感じました。タブレットに関するご意見は紙媒体でこだわり続けると抜け落ちてしまうことだと思うので、貴重な意見だと思います。

委員　　小学４年生から6年生にかけて読む量が減少していることについて、いろいろ考え

てみましたが、6年生になると委員会が入ってくるなど学校のために働いたり、授業の内容も難しくなったりして、図書室に行って読書をすることに費やす時間は減っていきます。それは仕方の無いことだと思いますが、読む楽しさを知る機会が減ることは残念だと思います。本を手に取るにしても、調べ学習のための本や、単元に関連する本がほとんどで、子どもたちは本を使って調べて大事なところを抜き出す作業をたくさんしています。本を読んで感動するような経験はなくなってきています。そこをどうにかしたいと思います。また、南小学校では6年生が1年生へペア読書として本を読み聞かせています。聞き手である1年生の、聞いているときの表情は素敵で、子どもたち同士の読み聞かせは特別なものだと感じました。読書手帳については、1年生の子が管理することも、ひらがなで感想などを書くことも難しいので、低学年までは保護者の方が記録して3、4年生からは自分で記録していくようになればいいと思います。そのためには、図書館と学校と家庭が連携して働きかけることが必要と感じました。

委員長　　子どもが読書をする場面をお話しいただき、様子がよく分かりました。記録を付けることの重要性も感じ、図書館ができることはまだあると思いました。他に何かご意見はありますか。

委員　　図書館のホームページについて、読書手帳のデータが掲載されているとのことですが、開く機会が無いとそこまでたどり着けないと思うので、何らかの形でホームページを開く機会を作るべきだと感じました。また、資料2の15ページの「お子さんと一緒に中央図書館を、どの程度利用していますか？」の質問の回答結果を見ると、中央図書館に近い地域にお住まいの方はよく利用されていますが、遠い場所にお住まいの方は利用が少ないという結果が出ています。「足を運んでもらうようにするには」というところで、図書館との連携の中で課題があると感じました。また、保育園では、本を貸出した際に、貸出カードに保育士が記入していました。本のタイトルの他、子どもの楽しかった、面白かったなどの感想を書き留めたものを卒園の際に保護者へ渡していましたが、子どもはこんなにたくさん読んでいたのかというお声がありました。しかし、今の保育士には貸出カードを記入することが負担で、他の所からのアプロー

チがあるといいと感じました。

委員長　保護者を育てるということは、図書館の読み聞かせに限らず全ての面でキーワードになることで、読書においてもどういう手立てで保護者を育てるかが重要になります。子ども読書とは0歳から18歳と長期に渡るもので、活字を覚えたり、本から得た知識を使って自ら考えたりと、人間が自立に向けて生まれ変わっていく重要な過程でもあります。図書館がどう関わりながら、どう支えるかが大きな課題と感じました。図書館から遠い地域に住んでいる人をどう図書館と繋ぐかも課題だと思います。ワークショップに参加した際に、長久手市は例えば、児童館に図書室があったり、共生ステーションに返却ポストがあったり、イオンのような大きなショッピングモールの中に貸出の窓口があるといいのではないかなど、さまざまなご意見がありました。必ずしも中央図書館に来なくても、より身近な、共生ステーションなどの市の施設を活用しながら、どこでも本と出会う場があることが大切です。本そのものがないと本に興味を持つことはできないと思います。家に本がある、図書館に本があることを知っている、そういう環境を作ることが大事です。さらに言うと、本を投げてしまったり、噛んでしまったりするような、大人からすると乱暴な行動が、子どもにとっては意味のあることで、それを肯定すること、「図書館の本は投げてはいけないから同じ本を買ってこようね」というような声かけのできる保護者をどう育てるかだと思います。学生達と話をすると、「絵本は本だから大事に扱わなければならない」、「書いてある内容には意図があるから子どもたちにそれを伝えなければいけない」と真剣に考えています。でも、絵本には特別な意味が無い点が良いところで、だから面白いのであって、絵本には何か教訓がないといけないと親が思ってしまうと、堅苦しいものになってしまいます。生まれてから18歳頃までは、初めての繰り返しだと思うので、いかに子どもに合わせて向き合っていくのかが大切だと思います。保護者からすると、投げてしまう子どもの心理が分からないから叱ってしまうことを、「大丈夫ですよ」と言ってくれる人が周りにいるとよいと思いました。

委員　今、絵本は内容を読み取らなくてもいいとか、楽に読めればいいということが分かりましたが、やはりワークショップでも親がどう読んだらいいか分からないという意見が

ありました。私のような普通に読み聞かせている人間にとっては衝撃的な意見でした。本の読み方が分からないとはこういうことなのかと感じると同時に、もっと読書を気楽に楽しめればいいのにと思いました。

委員　　みなさんの意見を聞いて私自身学ばせていただく部分が多くありました。先ほどの読書手帳の件ですが、アンケートの分析を一読し、中学2年生の娘がいますので中学校の事情を考えると、中学校に入学するという環境が変わるときに居場所として図書館があり、いつでも開いていることが当たり前になるといいと思いました。資料2の69ページにある学校連携司書の滞在時間を増やしてほしいというような切実な願いもあると思います。何ができるかは分かりませんが、私のようなボランティアが手伝えることがあればお手伝いしたいですし、何らかの形で学校連携司書の手助けになるようなことがあればいいと思いました。また、大人側から子どもたちへの問いかけとして、図書館がこんな風だったらいいな、こうしたらみんな図書館に行くんじゃないかというようなアイデアを子どもに聞くというのもいいと思います。 6月、7月に開催したワークショップは大人が対象となっていましたが、子どもたちが参加できるワークショップを開催し、子どもの意見を聞くことも大切だと思います。

委員長　　子どもたちに図書館がどうあってほしいか尋ねることは今まで行っていないと思うので、積極的に行う必要があると思います。学校連携司書の担っている役割がどれほどのものなのかは、アンケートの結果を見ていても分かります。資料2の68ページの「必読書・推薦図書をどのように選定していますか」の質問では、どの学校も「学校連携司書に任せています」と回答しており、先生方は学校連携司書を頼りにしていることが分かります。子どもにとって、中学校に入学し環境が変わるときに、居場所としての図書室は重要な役割を担っているにも関わらず、そこが閉まっている、学校連携司書がいないと踏み込めない状況があるのは、もったいないと思います。小学校の中で、特に低学年の子ども達には担任の先生からの働きかけはできると思いますが、中学年から高学年はさらに手厚くしないとうまくいかないと思います。そこは再度検討しないといけないのではないかと、お話しを聞いていました。

副委員長　　学校連携司書がいることで、学校の先生方も利用者の１人になります。もう１点、

地域との協働で、私が環境整備という点で学校司書として経験してきたことですが、学校教育支援センターのような機関が地域の方に向け、学校図書館の掃除や棚の移動など環境整備をするボランティアを募りました。メンバーの中に、読み聞かせをするベテランボランティアの方がおり、本の読み方や選び方、子育ての方法などを、環境整備中に雑談としてお話ししていました。お孫さんが学校にお世話になっているから来ましたという方もいて。このように、学校連携司書が学校図書館に常駐して、先生方と協働して、先生方と子ども達、地域の方を繋いでいけば、公共図書館との連携もできます。「読み聞かせはハードルが高いが、掃除や環境整備ならできる」というような、自分ができる範囲で応援したいという方を掘り起こすことが可能だと思いました。また、学生に「公共図書館をサポートする取り組み」という課題を出すと、自分のアイデアでもって何ができるか、現実的な意見を出してきます。やりたい、関わりたいという気持ちが学生には多くあります。子どものワークショップを大人も交えて開催すると、次の世代を担っていく中高生の子ども達にとっても、居場所ができてよいのではないでしょうか。同級生同士では言いにくいが、大人がいると雑談や悩み事を打ち明けることができ、顔見知りになることができたらいいと思います。

委員長　　学校図書館も含めて、地域のセンターや図書館の出先機関にどれだけ人を巻き込みながら、子どもの視点に立って図書館を考えるか、ということはなされていないと思います。子どもがワークショップに関わることなどによって、子どもたちが求めているものをつかんでいく、新たな関わり方を見いだしていく必要があると思いました。特に資料2の56ページ「中央図書館にあるＹ・Ａ（ヤング・アダルト）コーナーを知っていますか？また、そのコーナーの本を借りたことはありますか？」と、58ページの「中央図書館のホームページのどの項目をよく見ますか？」の回答結果を見ると、YAコーナーの認知度は低いように見えますが、1か月に図書館に5回以上来る子どもたちの中にはＹ・Ａのページを見ている子もいるため、Ｙ・Ａの情報を知りたい子はいることが分かります。「8割は知らない」という結果に目が行き、見落としがちになってしまいますが、本を読もうとしている子がいます。中高生が読書をしないことにばかり注目していますが、本を読んでいる子たちをどのように支えていくのかを考えていなかっ

たと思いました。

最後のまとめになりますが、巻末のアンケートを拝見して、長久手市のボランティアグループから高等学校に至るまで、読書について様々な工夫をされていることが分かりました。資料2のボランティアグループのアンケート回答の中には、「講談をやりたい」、「長久手市の歴史について興味関心を持ってもらえるような活動をしたい」というご意見がありました。また、70ページの高等学校の先生方が非常に尽力されていると感じたのは、質問4の「必読書・推薦図書をどのように選定していますか」の回答で、「自分が読んで高校生に合いそうだと思った本、短くても学びがある本、課題図書、話題本等を書店やネットで調べながらリストアップしています」というご意見で、大変な労力をかけながら子どもと読書を繋ごうと努力されている様子が見え、非常に読書に対しての思いが強いと感じました。こういった意見が上がっている間に、大人も子どもも含めて、図書館が活発に様々な年代の方のネットワークを結べる場所として、子ども読書を考えることが重要だと、ご意見を聞いて考えました。ここでお話しいただいたことが第 3 次長久手市子ども読書活動推進計画に盛り込まれていきますので、引き続きご協力いただきたいと思います。これを持ちまして、第 3 次長久手市子ども読書活動推進計画第2回策定委員会を終了します。事務局にお返しします。

事務局　議事進行ありがとうございました。第3回目の日程についてはまた改めてご連絡いたします。本日はありがとうございました。